R7 楡木小学校　学校通信
No.２２
なりたい自分になる！
In 楡木サラダボウル
令和７年１０月３日
文責　余宮

朝夕に秋風を感じるようになりました。季節の進み具合と同時に、子どもたちの学びも深まっています。

人の目は高性能！？

６年生がタブレット端末をもって、学校にある風景を写真に収めています。図工の学習かな？ちょっと聞き耳を立ててみたいと思います。

「思ったように映っていないなあ。遠近感がもうちょっと出てほしいんだけど…」

「お～ここ（廊下のかど）の写真だと、遠近が強く感じられます」

「だんだん小さくなっていくというか、そんな感じ」

どうやら、風景画で遠近感を表現する学習のようです。まずは、見た目と写真の違いに四苦八苦。自分の見えているようなアングルを探すのがさらに難しい。いろんな写真を撮り、見比べながら友達と相談。そんな過程を経て、廊下や体育館、校舎のかどなど、有名画家が風景画で愛用した場所と同じようなアングルを、子どもたちも見出していったようです。

写真で写してみてわかる、人の目の高性能さ。

自分で見たままを写真にしてみた時に感じる違和は、誰もが経験したことがあるのではないでしょうか。目で見ると、自然と主役にピントを上手に合わせ、複雑な状況を瞬時に理解できる。目はデフォルメして、そのための見え方を提供してくれているそうです。むしろ、写真と見た目が同じと感じることの方が少ないかも。元来、人の目は写真とは違う切り取り方を（意識的、無意識的にかかわらず）できるそうな。これは、人の目がもつ性能なのだとか。まだ、この性能を持っているカメラは存在しないんだそうです。

例えば旅行など、自分が撮りたいと思って撮った写真にもかかわらず、なぜこんな写真を撮ったのかが思い出せなかったり、思ったものが映っていないと感じる写真も意外にたくさんあったりしますよね。逆に、思いがけない記録写真に遭遇し、改めて学習の意義が深まることも少なくない。

なぜ、こんなことが人にはできるのか。やはり、人の意識を司る脳の働きによるもののようです。

人の目は、ある意味、見たいものを見るようにできています。逆に、見たくないものは見えない。だから、あるのに見えないものも少なくない、ということです。

「見えないゴリラの実験」という、**クリストファー・チャブリス氏**と**ダニエル・サイモンズ氏**(2010)が行った認知心理学の実験があります。この実験は、数名のバスケットボールプレーヤーがパスをやり取りする動画なのですが、「何回パスをやり取りしたのか正確に数える」というミッションが課されています。（以下ネタバレします。もし先にやってみたい方は、インターネットで「見えないゴリラ実験」と検索し、自身でもご経験されてみてはいかがでしょうか）

凝視してパスの数を数えているその画面を、なんとゴリラが横切っていくシーンがあるのです。それも、結構大胆に。でも、パスの数を真剣に数えている人は、その横切っていくゴリラが見えない。驚くほど、見えない。

非注意性盲目と名付けられたこのような経験は、誰しもあることでしょう。高性能であるが故、見えているようで見えない人の目。だからこそ、６年生の学習のように、自分の見たいものをカメラに収め、改めて見直す活動がとても重要な学習になるのでしょうね。